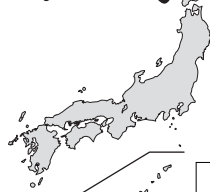


国土学事始め



大石久和

国土技術研究センター理事長

道の駅は全国に860カ所もでき、いまでは高速道路のサービスエリアのように、道路を利用する方々に利用していただいています。この歴史を少しご紹介したいと思います。いまでは、国土交通省の政策となっていますが、実は地方のある方々の発想と実践

で生まれたものなのです。

いまから20年ほど前、広島で地域を元気にするにはどうするか、といったことをテーマにフォーラムが開かれました。それに出席するため、山口県阿東町で船方総合農場を運営している坂本多旦という方が、夫婦そろって車で出か

地域の歴史と現在の発信を

けました。ところが運悪く、奥さんのおなかの調子が悪く、苦勞してトイレを探しながらの旅となったのです。フォーラムに出席した坂本さんは、その経緯をもとに「鉄道に駅があるのに道にも駅があってもいいのではないか」と発言したのです。それを聞

いて「なるほど車で出かけるとなると、トイレのためにドライバインに寄ったりするけど、道に駅のようなものがあるといいかもね」と思ったフォーラム参加者がいたので

す。こうして山口県など中国地方の各地で、路端のちょっと

した空き地に工事現場にあるような簡易トイレを置き、ついでに農協や漁協の青年部や婦人部の方が、野菜や干物などを並べてみたのです。そうしたら、なんとむしろ旗に描いた道の駅に、多くのドライバーが寄ってくれたのです。それでは観光地ではどうだろ

うと、岐阜の高山ではチップトイレにしてみました。すると土日には1万円から2万円ものお金が入りました。こうしてドライバーは道に駅を求めているとの実感が強まってきたのです。

このような経緯を経て、ドライバーに休憩をしてもらうことを通じて、地域からの情報を発信し、それによって地域と地域が連携していくという道の駅の基本理念ができ、それが今日に至っています。単なる地物販売所にとどまるのではなく、通過していく方々に対して、地域の歴史と現在を発信する拠点としての機能を充実してほしいと願っています。